

DRAMA かながわ 82

神奈川県演劇演習事務局：神奈川県横浜市中区新港1-3 Tel.045-263-4472



第18回

かながわ演劇博覧会

2021年3月13日(土)～14日(日)

神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

文：演劇博覧会実行委員 穂村一彦(劇団「無題」)

第18回かながわ演劇博覧会(以下「演博」)が今年3月13日(土)～14日(日)で開催され終了しました。公演から2週間以上が経過しましたが、現在において新型コロナウイルスによるクラスターの発生および感染について報告・連絡はございません。このご時世の中、無事にみんなで公演をできましたことを大変嬉しく思います。

昨年の第17回演博は残念ながらコロナ禍を受けて中止となりました。当時は未知のウイルスという印象が強く、対応もバタバタしたものとなってしまいました。同時期の他団体の公演も次々と中止になっていき、先の見えない状況に戦々恐々とする毎日でした。

あれから一年。この一年間、多くの団体や演劇関係者が試行錯誤をして、どうにか演劇を続けられなかった道を模索していました。客数制限や事前予約制。消毒、換気、検温チェックなど。私たちもそういった手

法を学び、今回の演博でも使わせていただきました。

今まで「入場無料、事前予約なし、途中入退場OK」とおおらかに開催してきた演博が、初めて挑む「事前予約制」「休憩時間一度観客席を無人にしてからの換気と消毒作業」「受付でのチェック作業」など。

慣れないことばかりで大変でしたが、そのような厳しい状況の中、演博を無事に開催できたのは、演劇関係者のかたがたの努力と想い、そして演博舞台スタッフ、参加劇団の皆様、ご来場くださった皆様のご協力のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今回は「役者たちによるお客様のお見送り」は無しとさせていただきます。せっかくお越し下さった皆様と挨拶をかわせないのは非常に残念なことでした。いつかまた、何の不安もなく、心の底から演劇を楽しめる日々が戻ってくることを祈っています。

第18回 かながわ演劇博覧会

文：熊手竜久馬・木之枝博太郎（虹の素）

■ 劇団かに座『ある木曜日のほんの少しの物語』

70年以上の歴史を持つ超老舗劇団の“新人公演”
まだ経験の浅い役者達を年齢も経験も先輩の方がが
がっちり脇固めをしてサポートしてとても温かく
愛おしい空気が感じられた。

「人と人との間が広がっていく世の中に、遠くなった二人を繋ぐのは、空気の読めないかき乱すような存在ではないか。」というテーマの元で、公園のベンチで出会ったとある男女とその周りの人達が織りなす人間模様。AIも盛り込まれており、若い「世代」も「時代」もきちんと取り込んでいるのが、きっとこれだけ長い歳月、劇団活動を継続されてきた秘訣なのだろうと感じた。

■ 劇団「無題」「戦国SNS時代」

作・演出の穂村さんの台本は、ここ数年全国各地から上演許可の申請が届いている。本家、劇団「無題」の新作。

戦国時代にSNSがあったらというシンプルだけどとても興味深い設定で繰り広げられるストーリーは、誰もが知る信長、秀吉、光秀の「歴史」とYoutubeやInstagram、ツイッターなど今を生きている中で身近に感じている「現代」の融合具合が見事で、ずっとと世界観に引き込むと同時に、役者達の緩急あるお芝居も相まってコミカルで飽きることなく最後まで駆け抜けていきとても楽しめた。

■ 劇団カレーライス（小盛）『夕風に捧げるティータイム』

ワクワクとする幕開けは舞台の酸っぱい味だと再実感しました。舞台セットはアンティークな丸テーブルと椅子のみ。シンプルながらも、作品的に印象を残す。それは、とても美しい照明と効果的な音響のテクニカルの力も相乗した結果だろう。

キャストは5人。そして45分という短い時間で大作を観た後のような感覚が残った。舞台は18世紀のバリ。露天商でペテン師の女ニナと、不老不死の呪いで生き続けている男クロードの物語。彼は長い歳月で舌や鼻の機能が衰えているが、紅茶の味と香りだけはわかると言う大の紅茶好き。そこに現れる永遠の美を保つ為に若い娘の生き血を浴び続ける「血の伯爵夫人」

エリザベートの一味や、クロードが仕えていた令嬢とのストーリーなども出てきて、とにかく内容が盛り沢山。この作品はいつかもっと長編版で見てみたいと思いました。

■ 劇団砂からマカロン『とある古着屋の日常』

とある古着屋の店長と、そこで働く2人の従業員のお話なのだが、見せ方お見事でお洒落。朗読劇は動きが少なめになりがちですが、登場人物の服装が変わっていくという視覚の変化と会話のテンポが観客を引き込む。

舞台上には3本のマイクと譜面台、そして3つのシェンダーにかけられた様々な服たちがある。それを上手く引き立てるように作られた綺麗な明かり、BGMの選曲がとても効果的だった。ファッションショーと、お洒落のポイントの語りの動画撮影のシーンがとても惹きつけられる演出だった。「着こなし」についても普通に勉強になりました。このコロナ禍のなかで、朗読、そして映像としてもとても見やすく、今の時代に合う作品。今回は朗読ではない形での上演でも見てみたい作品だった。これからにとっても期待！

■ 劇団CloveR「自粛中の私たち／空飛ぶ豚／星をたべる」

高校生の頃から演博の常連になってきた劇団クローバー。劇団員それぞれが書いた短編「自粛中の私たち」「空飛ぶ豚」「星を食べる」の3作品を上演。コロナ禍の大学生の日常とリアルを等身大で届けた1作目。

何が起きているのか分からない、なのになど面白く2作目。若い子の発想って面白いなと感心。そして3作目の、星を探してどこまでも旅をする少年のお話。これがクローバーの真骨頂かなと思う作品。エモい照明も交わってとても綺麗で繊細な空気と世界観を味わえました。来年以降もぜひ演博に参加し、挑戦し続けてほしいと思う。今後の成長がとても楽しみです。

本公演ではどんな舞台を作っているのか、各劇団に興味を引く「演劇博覧会」でした。例年通りではないことが多々ある今年の開催でしたが、とてもやった意義のある公演だった、やれてよかった。と、強く思う演劇博覧会でした。

第18回 かながわ演劇博覧会 参加者の声

今回の公演は私にとっては初めての舞台上で演技をするということに不安もありました。公演が始まると自分が緊張していることがよくわかりました。それでも稽古で考えてきたことや学んだことを意識し最後まで演じることができ、達成感でいっぱいでした。公演終了後には、嬉しい感想をいくつも聞かせていただき、私の演技が観ている方々に伝わったのだと安心しました。また舞台上に立ってお芝居ができるように、これからも稽古を重ね、成長していきたいと思います。こうして無事に終わったのはたくさんの方々の支えのおかげです。本当にありがとうございます。

北川篤郎（劇団かに座）

劇団「無題」がお届けした作品は、本来であれば、去年の演劇博覧会で上演する予定だった「戦国S N S時代」。「もしも戦国時代にSNSがあったら？」というお話でした。舞台は戦国時代ですが、登場人物やお話的にも、今の現代に色々通じるものがあるのではないかと思います。稽古期間中に再度発令された「緊急事態宣言」。正直このままでは色々な意味で上演出来ないんじゃないか？という気持ちも頭によぎりつつも、今回無事上演する事が出来ました。最後に、この情勢の中、ご来場頂いたお客様。本当に有難うございました。

悠希（劇団「無題」）

劇団カレーライスは6月に横浜公演を控え、「演博」と並行し稽古を行って参りました。「折角の新規ユニットなので、普段とは違うものを」という事で人々の激情をエネルギーに描く作品を目指しました。結果、かなり異色の演目となり観劇頂いた方にも良い意味で刺激を与えられたのではないかと思います。ライブ配信も無事に成功、WEBアンケートの反響も良く、45分の作品で満足を得られたとの感想をいただく事ができました。演劇博覧会実行委員会・関係者には感謝の念に堪えません。今後とも、劇団カレーライスが神奈川県演劇文化の発展に貢献してゆければと思います。西村穰（劇団カレーライス（小盛））

初のプロデュース公演、初の朗読劇。ド新人の私はずっと不安定な状態で役者たちと接していましたが、気付けば私も役者も作品に自信を持つようになり良い公演となりました。お客様の拍手を頂けることの有難みを改めて感じることができました。嬉しい感想も頂きました。【新しい演劇を観た】と。演出として狙い通りです。世界一、着替える朗読劇をしよう。そう言ったときに賛成してくれた役者たちには本当に感謝しています。しっかりお客様に伝わりましたよ！沢山の皆様に支えられて無事成功させることができました。2021年度を迎えるにあたって素晴らしいスタートを切ることができたと思います。

本庄未怜（劇団砂からマカロン）

私たち劇団C l o v e Rは5回目の参加でした。自粛期間に私たちは様々な意見を出し合い、初の短編に挑戦することになりました。初めて台本を書いたり、一から道具をつくったりと例年以上に学びがたくさんありました。私が書いた短編『自粛中の私たち』は、緊急事態宣言発令中に実際に行なっていたことや流行っていたものを基につくりました。稽古時間が短く完成させることができるのかなど様々な不安がありましたが、本番当日お客様の拍手や感想を聴いて舞台上に立つことができ本当に良かったと感じました。

星野奈緒（劇団C l o v e R）

バトンをつなぐ ～演劇資料室のこと～

文：井上 学

シェイクスピアの作品がどんな形で上演されていたか、演出など細かいところはよくわかっていないらしい。たとえばその衣装などが時代考証に基づくものではなく、上演された当時の服だったことは、かなり長い間知られておらず、学者らの研究を受けて、20世紀になってから現代服のハムレットなどという演出が生まれたのだそうだ。

一方、日本でいえば、現存する最古の能装束は「室町時代後期に世阿弥の甥の音阿弥が將軍足利義政から拝領した」ものだそうで、今も実際に舞台上で使われているという（能楽協会ウェブサイトより）。能舞台も1581年頃（シェイクスピアとほぼ同時期）の建物が現存しているというのだから、消えてなくなるはずの演劇の、残っているモノの多さには驚かされる。

演劇資料室には現在、約9,000冊の図書と10,000冊以上の雑誌が収蔵されている。それらはもちろん大変貴重なものであるが、実は書籍以上に大切なのは公演資料だと僕は思っている。

いつ・どこで・どんな団体が・どんな作品を・どんな風に上演していたかという記録の価値を同時代に生きながら評価することは難しい。だが、後々、そうした資料を参照することでその時代の演劇状況や空気を読み取ることができる。資料は現代に生きる多くの人にとって「役に立つ」わけではないが、未来の演劇界には必ず意義をもたらさだろうと僕は思っている。だからこそ資料を「残す」意志と行動が大切なのである。いま僕が最も貴重だと感じているのは、「職場演劇」

の公演資料である。現代の感覚からすると驚きだが、かつては企業内に（主に労働組合を母体とした）自主的な演劇サークル（演劇部）が数多く存在し、演劇の1ジャンルとしてしっかりとその地位を確立していた。時代の変化とともに、サークル（演劇部）活動は停滞し、職場演劇という形では消滅していったが、日本の近代演劇史を語る上ではとても重要な存在だ。

職場演劇が神奈川において特に盛んだったということはないだろう。しかしその公演資料がある程度まとまった形で、第三者によって保存されているのは、演劇資料室のほかにはないと思う。

江戸時代の研究にとって貴重な史料の一つが襖の裏張りに使われた反古紙だそう。ゴミとして捨てられるようなモノでも時代を語る証人になる。後世、何が役立つかは誰にもわからない。だからこそ残す。残して後世に託す。職場演劇が100年後にどんな評価を受けているかなど誰にも明言できないのだ。

能の装束や舞台が残っているのは、単に継続的に上演されてきたからだけでなく、残す意志を持った人々がバトンをつなぎ続けたおかげだろう。バトンが途切れれば歴史は失われ、存在そのものも消えてなくなってしまう。

演劇資料室の公演資料は、すでに何人もの人の手を経てここにあるものだ。自分が第何走者なのかかわからない。でもバトンのつなぎ手として、スタッフは今日も手弁当で走り続けている。見えないゴールに向かってただただ走る。次のつなぎ手にバトンを渡すまで。

神奈川県立青少年センター・演劇資料室をご利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ、演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸し出しもしています。ご利用は1回3冊まで、2週間借りられます。また、神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もごさいますので大いにご活用ください。皆様のお越しをお待ちしております。（開室は火曜日から日曜日。午前9時から午後10時です。）

神奈川県立青少年センター 2階 演劇資料室 〒220-0044 神奈川県横浜市区西区紅葉ヶ丘 9-1 電話：045-286-4485
※コロナウィルスの影響で開室時間等に変更が生じております。ホームページをご確認の上、お越しください。http://kenenren.org/

コラム「二〇二〇年と私」

文：劇団820製作所 波田野淳純

新型コロナウイルスとは関係なく、わたしたちの劇団はもう長く活動を休止していた。SNSから極力離れ、仲間ともほぼ会うことはなく、演劇の流れから取り残されていた。三月、各地で公演中止が相次ぎ、幾多の演劇人の創作・生活が脅かされていることを知っても、それは遠くの喧噪として受け止められた。自分自身のことで、呆然としていたのだ。

この度の感染症の流行は、演劇の最も本来的な「空間をともにすること」という機能をわたしたちから奪った。いつかまた演劇をする日が来るのだろうか、と鈍い痛みとともに緊急事態宣言の発出を聞いたのが四月。

五月、文化芸術の補償を巡る平田オリザ氏の発言が、掛谷英紀氏という右派論客に取りざたされ、一斉に批判を浴びることになる。製造業への支援の仕方と舞台芸術や観光業への支援の仕方は異なるものではないか、という業種間の構造の違いを指摘する平田の言葉を、掛谷は「この人は技術者を舐めている」と恣意的に切り取った。犬笛を聞きつけた人々が大半して演劇に押し寄せた。飛び交った言葉をいくつか引用する、恣意的に。

……「大根役者をコンクリに並べる幼稚園お遊戯発表会」レベルのゴミ発生源の劇団……

……一番不要不急の娯楽ジャンルが調子乗って、国の基幹ジャンル舐めてる……

……演劇なんてなくても困らないよ。元々誰のためのもんだよ。内輪でぐちゃぐちゃやってるだけにしか見えねえよ……

久しぶりにSNSを開いて、これらの言葉が目に見え込んできた。平田の発言の是非、掛谷の批判の正当性は問わない（掛谷の犬笛の吹き方と論理の封殺の仕方は、扇動者のふるまいの典型に見えるが）。事実として、演劇が憎悪の火種となり、さまざまな糾弾の言葉が繰り出された。ここに見られるのは演劇人の「人種化」だ。わたしたちは「社会にとって有害な、他者への想像力を欠いた身勝手な者たち」と一括りにされ

た。演劇人が有徴化し、市民から後ろ指を指された。観測できた範囲では、若い演劇人がさっそくそれらの眼差しを内面化し「わたしたちはあんな演劇人にならない」と意気軒高に語っていた。

八月、安倍晋三が首相を辞した。そのことに動揺し「一日ブルー」、「ショックすぎる」と語った二十歳がいた。「安倍さん辞めないでほしい」、「寂しい」と本心から口にする。彼が小学生の頃からこの国の首相は安倍だった。八年の歳月は長い。お昼のご長寿番組が最終回を迎えたときのことを思いだす。僕が森田一義に対して抱く感慨を、おそらく彼は安倍晋三に対して抱いている。安倍が何をしたか、しなかったかは関係なく、メディアを通して安倍と市民の間に親しさが形成され、後には朗らかなイメージだけが残る。ある野党の政治家に向かって、新聞記者がこう語ったという。「野党は物語が弱いんだ。安倍さんには物語がある。一度失敗した者が再挑戦するというのは、物語として強い」。

いま、わたしたちはかつてなく安手の物語に飼い慣らされている。医療従事者への激励に曲芸飛行を見せれば喜ぶと思われている。確実に開催されないであろうオリンピックも未だに「人類がウイルスに打ち勝った証しとして」開催が予定されている（新年の年頭好感では「世界の団結の象徴」に文言が変更された）。物語が、「群れの導き」のために使用されている。

決めつけやばぐらかし、単純な語法の連呼、粗雑で声高な言葉の蔓延。そのような事態を観察して初めて、自分のなかの「演劇人」が顔をもたげた。古来、演劇が炙りだそうとした人物たちは、共同体に背を向け、石を投げられ、「ひとり」の立場から世界と向き合う人間たちだった。その「ひとり」の興亡の物語を通して、わたしたちは内なる孤独を共鳴させ、誰かと「ともにある」という感覚を恩寵のように与えられてきた。たとえ空間の共有が難しくとも、「いま、ここに別の時空間を重ね合わせる」というもう一つの演劇の機能を軸に、孤独な魂に寄り添うことは可能だろう。映像を通して、写真を通して、書くことを通して、その他の

方法で。群れから逃れ、硬直を解くための言葉を発することはできるだろう。演劇に何もできないわけがない。有事の時こそ、演劇は発動する。

二〇二〇年の大晦日、東京の新規感染者数は1, 337人、神奈川県は588人。緊急事態宣言が発出された四月七日の感染者数のそれぞれ十七倍、三十三倍の数である。先行きは見えない。事態がどう転ぶかわ

からない。再び劇場は閉鎖されるかもしれない。

夏、同年代で最も信頼する演出家である伊藤全記氏が深夜の電話で語った言葉を思いだす。「大丈夫、演劇は待ってくれるよ」。二〇二〇年を振り返るとき、必ず呼び起こされる言葉となるだろう。わたしたちは各自の演劇を粛々として尖らせていくしかない。それぞれの場所で。

2020 年度神奈川県演劇連盟総括 「コロナ禍の中で」

文：神奈川県演劇連盟理事長 横田和弘（劇団河童座）

今年度は語れば全てが新型コロナウイルスに行き着いてしまう。演劇界だけでなく舞台芸術、全てのエンターテインメント、スポーツ、などありとあらゆるジャンルにおいて、人間の歴史始まって以来の大ピンチの年だったように思われる。皮肉って言えば、全世界が初めてベクトルの向きを描いて戦った年だったのかもしれない。

当然神奈川県演劇連盟においても、合同公演・TAK IN KAA T・芝居塾などの中止。演劇博覧会の昨年度に引き続き関係者・招待者だけの公演（5劇団参加）。そして主軸である神奈川県演劇フェスティバルの参加劇団の激減（8劇団）。その影響は大きかった。コロナウイルスの嵐の中、相次ぐ行政・劇場のガイドランスの変更に困惑、更には稽古場の確保すらままならないのでは、公演予定が立たないのも当たり前。予定の公演中止は更に劇団の疲弊を大きくしたに違いない。更に、神奈川県演劇連盟にも多いアルバイトを生活の糧に演劇を続けてきたフリーランスの人にとってはまさに死活問題でもあった。

勿論そんな中でも公演活動を続けていた劇団も多い。しかし、三密、クラスターの呪縛の声は大きく、創る側にも観る側にも異常な中での芝居創りが多かったように思われる。マスク・消毒の義務化はまだしも、役者間のソーシャルディスタンスは表現に多くの影響を与えることとなったし、劇場定員の制約は制作的に当然大きな打撃を与えることとなった。客席の入退場の規制、客席作り方、観客の住所連絡先までも署名など個人情報は何と思われる調書記入などはこれも初めてのことで、観客席側にもその異常さを感じさせたに違いない。それでも観客から大きな不満の声も聞かれ

なかったのは、ことの認識と温かい観客の想いに感謝したいところであった。

心配なのは、この状況が長く続けば、持ちこたえることのできない劇団、個人が増えてくることだ。現に神奈川県演劇連盟の中にもその兆候は出始めている。底辺を支える若き人材の損失は、大袈裟に言えば日本の演劇界の衰退にもなりかねないことかもしれない。

昨年、幾つかの小劇場でのクラスター発生などに伴い、劇場側もより厳しい規制を強いられ、発表の場さえ失われる不安を感じざるを得ない状況であった。そんな状況下でも様々な取り組みで演劇活動を続けてきた劇団活動も多くある。リモートでの発信、無観客での同時オンラインでの発表、YouTubeなどでの映像配信。さらにはズームなどによるリモート稽古。これらは今後にも一つのツールとして、新しい可能性も生み出したのかも知れない。しかし『生』でこそ演劇。無観客の演劇はその醍醐味を失うこととなるし、映像配信は当たり前だが映像文化になってしまう。早く対面式の稽古が復活し、多くの観客に囲まれての、本来の演劇環境復帰が望まれる。幸い？なのか、集客が激減かと思っていたのだが、客席数が減ったためもあるかもしれないが、満席近くのお客様を迎えることが出来た多くの会場が見られたこと。これは創る側だけでなく観る側も舞台芸術への、演劇への渴望と受け止めたい。

そんな想いに応えるべく、全ての環境が整った時には、コロナ禍の鬱憤を晴らすような舞台を創るべく力を蓄えていてくれていると、信じた。

早く「コロナ禍のあの時は大変だった」と笑顔で話せる日が早く来ることを切望したい。

僕らの演劇

劇団河童座

「つるの恩返し／カチカチ山」脚色／演出：横田和弘

2020年11月21日～22日 於：横須賀市立青少年会館3Fホール

コロナ禍で弱っていた気持ちを晴れやかにしてくれた舞台でした。

劇団河童座の第235回公演「つるの恩返し／カチカチ山」です。日本人にはなじみのある民話モチーフですが、つるの恩返しは夕鶴を逆に脚色し、カチカチ山は太宰治「御伽草子」をベースとした異色の2作品でした。

助けてくれた老夫婦を父母と慕う鶴の化身である少女は欲にまみれた人間の言葉が理解できなくなります。次第に父の言葉が理解できなくなるも、自己を犠牲にし機織りで恩返しを果たそうとする姿におじいさんは改心します、そしておばあさんは鶴である少女に群れに戻るように伝えまします。原作の「鶴の恩返し」や「夕鶴」には無い、鶴と老夫婦の「親子」は「愛」を見失う事無くお互いの生活に戻っていきます。脚色ならではのハッピーエンドがとても心地よい作品でした。

コロナ対策である換気の為の中休憩を挟み後半はカチカチ山、こちらは非常にブラックに完膚なきまでにウサギがタヌキをこらしめる、そこには正義すらないひたすら残酷な原作ですが、笑いを交えて安心して見られる作品でした。久しぶりの観劇をして思った事は「演劇は存在しつづけている」という事でした。

このコロナ禍、日々生活する事すら不自由な中、演劇というモノは必要なのだろうか？と言う人もいるかもしれませんが、しかしながら河童座の舞台には演劇を届けたい人とそれを受けとめたいという人が集まっていました。これが演劇が必要であるかどうかの答えだと思いました。検温やソーシャルディスタンスを強いられても生の舞台はとても心地良く、演者と客席の距離は心理的にはコロナ禍以前と変わっていませんでした。満足行く環境でなくても、コロナ禍でも「演劇は存在しつづけていました」歴史ある劇団河童座からの「演劇文化を絶やすもんか！」という意志がはっきりと伝わる公演でした。

プラスチックな月 福本ぶう之介



京浜協同劇団

「コロナ退散！笑劇場」演出：和田庸子、護素一

2020年11月21日～23日、28日～29日 於：スペース京浜

中止や延期が珍しくない昨今、消毒・換気・客席の半減などコロナ対策をしながら、また上演に向け稽古や演目を工夫された、芝居ではなかなか見られない役者たちの舞台だった。それに応えて前列のお客様はフェイスシールドを付けるなどの協力もする。そして、その場面では笑いと拍手は惜しまない。先ず司会の挨拶から始まる。

最初の演目は漫才「そのこ&トシちゃん」。せりふを忘れたようであっても、突っこみたいところも多々あっても、この二人の掛け合いは微笑ましく客席を温めてくれた。



次なる落語の演目は「芝浜」。ご存じの方も多い演目でも私漏れず楽しみにしていた。私が見落としていなければ、あの粋な二文金の数え方の見せ場「ひとひとひとひと、ふたふたふたふた・・・」が無かったようであらう残念である。「おもしろマジック」も見てみたかった。

3番手は、狂言芝居「お告げの妻」。舞台の床の四角に「しるし」が有り、狂言舞台を模していたが、狂言「因幡堂」をお芝居仕立てに脚色したモノ。酒飲み妻と離縁し新妻を授けられようとする亭主が因幡堂に願かけに行く。怒った妻が薬師如来、新妻になりすまし亭主は如何に〜と成るわけだが二人の相性が良く、妻の持つ可愛らしさ、亭主の人の良さが表現されていて楽しい狂言芝居になっていた。

大道芸は、各日違うパフォーマンス披露のようだが、この回はアクロバット！見せ場ではお客さまの息も止まるような注目を集める流石だ！

劇団と縁の深い方による「ピアノとともに」。「展覧会の絵」を演奏された。最後に安達氏のリードで「早春賦」を客席のみんなと歌う。盛り沢山だ。

演じる方も観客も高齢者が多い。それでも舞台上演を諦めない「コロナ危機でも守り抜きたい」劇団の姿勢と、観劇に来るお客さまの心意気。どちらにも拍手をおくりたいと思った。

まりこ☆みゆーじあむ 川井眞理子

演劇プロデュース『螺旋階段』

「カントリー・カントリー」 作/演出:緑慎一郎
2020年12月11日～13日 於:小田原市生涯学習センターけやき

年末に行われる小田原での螺旋階段の公演。ここ3年ほど楽しみにして欠かさず観ていたが、今年は仕事のため、配信映像を観ての感想を書かせていただきます。

まずは映像配信について、この年は多くの劇団が映像配信に挑戦し私もそれを見る機会がありましたが、中には単なる同じ方向のみを映した記録映像を配信している劇団も多く、とても鑑賞できないものもありました。しかし螺旋階段の今回の配信映像は、観た人が劇場で観ると同じ構図になるようよく考えて撮影編集されていて去年LIVEで観た舞台と遜色なく、ストレスを感じずに観ることができました。昔テレビで見て楽しんだ吉本か松竹の新喜劇の良質の舞台中継を思い出します。この映像配信は成功です。

話はある地域にあるアメリカンダイナーをイメージした食堂兼居酒屋のような店「カントリー」、店員そしてそこをいつも利用する常連客を演じた役者さんの個性そして演ずる上手さで生まれる面白い会話、それが弾む日常、そんな中この場所から離れた男が15年ぶりに帰ってきて大きな波紋が生じ物語が急展開する内容。評論家でないのでうまく言えなくて申し訳ないが、とにかく面白いにつきます。作・演出と役者と舞台スタッフ、それぞれがお互い信頼し合いあっているように生まれない三位一体の舞台の良さを感じました。一言で表すとしたら、わかりやすく面白くて演劇を何も知らない友人を連れて行っても安心して楽しんで観てもらえる舞台。映像を見終わって「楽しませてくれてありがとう」と申し上げたい。

しかしこの舞台、観ていて小田原の郊外にありそうな店舗ではないかと思え、そんな舞台の場所である小田原に行けず歩いて体験できず、また良い舞台の感想をすぐ作・演出の緑さんと役者・スタッフの方に伝えられない映像配信の観劇はとてもさみしく、次回こそは小田原に行こうと決意するのです。 studio salt 野比隆彦



虹の素

「失恋博物館V」 作/演出:桜木想吾、熊手竜馬、木之枝紳太郎ほか
2020年12月24日～26日 於:スタジオHIKARI

場内には舞台となる4つのエリアがあり、その真ん中に十字路のような通路があり、客席は設けられていない。それぞれのエリアで上演される「失恋」についての短編を観客が自由に移動して見て回る。壁際には各演目にまつわる小道具と、失恋について綴られたメッセージなどが展示され、開演前や休憩中にそれらを閲覧することができる。開演前、マスク・フェイスガードを着用した出演者がキャラクターを演じながら案内してくれる。テーマパークのような演出で観客を「失恋博物館」の世界へと誘っていく。

7本立てなのだが4本目『いいんだよ』を取り上げる。電車内の設定で、場内中央の通路の両側に役者を配置し、観客も登場人物の一人になったように観劇できる。母が危篤のため病院に向かうが、その電車が人身事故で停車してしまう。苛立ちと不安が満ちていく。車内で電話をすることを答める者がいる中で、母の最期の声を聴くため電話をかける。そこで生まれる緊張感は、観客たちをも乗客「役」にしてしまう演出だ。全7本のなかでは異質であり、出色の作品だった。母の命がついた悲しみをその場にいる全員が共有し、人身事故の被害者のことを忘れてしまうというアイロニーもきいている。

コロナ禍の下、マスク着用や消毒など細心の注意を払いつながりながらもこのように観客と役者の距離が著しく近い公演を行うことはとても勇気のある作業だったことと思う。そして、「夢を諦めるか否か」というテーマを扱った演目が2つあるということがこの世情を反映しているように思えてならない。そんな先の見えない不安だらけなこの世界で「ゼッタイ芝居をやり続ける!」という決意と覚悟を感じる。これからの神奈川の演劇シーンを引っ張っていくのは、彼らの世代なのだ。未来は明るいと信じられる。

theater 045 syndicate 中山朋文



神奈川演劇連盟加盟団体(50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ● 京浜協同劇団 ● 劇団言い群 ● 劇団おらんだ ● 劇団河童座
- 劇団かに座 ● 劇団唐ゼミ ● 劇団こゆるぎ座 ● 劇団砂からマカロン ● 劇団820製作所 ● 劇団「無題」
- 劇団横濱にゅうくりあ ● theater 045 syndicate ● G/9-Project ● TEAM IMITATION ● 虹の素
- プラスティックな月 ● シュマロ・ウェーブ ● まりこ☆みゅーじあむ ● M.Pin.K(ミュージカルプロジェクトin神奈川)
- ムームー企画 ● 横浜小劇場(横浜演劇研究所付属)

神奈川演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第82号] 発行日:2021年3月31日 発行:神奈川演劇連盟 編集:オッスたかのり(劇団かに座)・吉浜直樹(劇団横濱にゅうくりあ) 穂村一彦(劇団「無題」)・緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・寺師涼(Team Imitation)・野比隆彦(studio salt)・波田野津純(劇団820製作所)